

万吉だより

MA GECHI NEWS

第9号 平成20(2008)年12月

梵鐘展によせて

館長 池上 悟

立正大学博物館の主要なコレクションとして、梵鐘研究を大成された坪井良平氏に教えを請われた眞鍋孝志氏によって寄贈された、梵鐘を中心とした「撫石庵コレクション」がある。開館に当たって寄贈を受けて以来、梵鐘を立正大学博物館の主要な研究課題として採り上げ、関連する梵鐘の調査を継続している。平成20年度の特別展として、梵鐘を採り上げた所以である。

中世に定型化した梵鐘は、各地に定着した鋳物師の活躍を、伝来した製品により窺うことができる。鋳物師の特定は梵鐘表面に鐫刻された銘文により確定することができるが、特定系譜の製品は梵鐘を懸垂するための龍頭、表面に施された袈裟襷などに差異をもって表されている。関東地方においては、河内に系譜を有する鎌倉時代からの相模の物部・清原氏、上総に定着した大中臣・広階氏などが著名なところであり、いずれも坪井良平氏の業績に基づいて研究が進められている。

考古学資料としての梵鐘研究は、他の歴史時代資料と同じく単なる金石文研究と違い鐫刻された銘文のみならず、形態的特徴をあわせ分析する点にある。特定系譜に属する製品の形態的違いは、銘文の認められない資料の所属を想定することができる。各地で梵鐘鋳造跡が調査されているが、近時調査された埼玉県・金井遺跡の資料は、確認された鋳型文様の特徴から相模に本拠をおいた物部氏系の鋳物師による活動が復元された稀有の例である。

現在まで伝えられた梵鐘は幸運に恵まれたごく僅かな資料であり、多くは様々な要因によって失われたものと思われる。梵鐘鋳造遺跡の調査は、かつて存在した資料を復元し、歴史研究の素材を提供するものとして重要な意義を有する。

第5回企画展

「梵鐘－撫石庵コレクションを中心に－」

平成20年6月2日(月)より7月5日(土)にかけて、第5回企画展「梵鐘－撫石庵コレクションを中心に－」を開催しました。

立正大学博物館の貴重な収蔵資料のひとつである「撫石庵コレクション」は、世界各国の鐘を中心としたコレクションです。これは、眞鍋孝志氏(元日本古鐘研究会会長)が長年にわたり蒐集されてきたものを立正大学に寄贈されたものです。これまでに『撫石庵コレクション』(立正大学学園 平成12年)・『撫石庵コレクションII』(立正大学学園 平成13年)としてその内容を報告してきました。今回の企画展は、その後新たに寄贈された資料の紹介として、これまでの資料と合わせて展示開催しました。

展示では、撫石庵コレクションの紹介とともに梵鐘の製作過程、中世・近世の関東地方の梵鐘として埼玉県を中心に中世梵鐘や鋳型などを展示しました。

梵鐘の製作過程では、撫石庵コレクションの一つである「伝榑原市出土鐘」の復元鐘の製作工程を紹介しました。これは、眞鍋孝志氏によって平成18年11月に寄贈していただいたもので、その際鋳造の立ち会いの機会を頂き製作工程の一部を撮影させて頂いたものです(『万吉だより』6号 平成19年3月刊にて詳細報告)。

また、この製作工程と関連して中世の鋳型と溶解炉を展示しました。これは、平成元年～2年にかけて(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査によって発見されたものです。鋳型が出土した遺跡は埼玉県坂戸市に所在する金井遺跡で、中世の鋳造遺構が多数確認されています。

鋳型は、金井遺跡のB区で出土しました。その



第5回企画展

「梵鐘－撫石庵コレクションを中心に－」チラシ

特徴は、撞座にみられ中房に1+8の蓮子を配し、中房の輪郭は中心方向に切り込みの有る八花形で、鎌倉時代に相模国を中心として活躍した物部鋳物師の作品と共通する所です。この他にも物部鋳物師の作風に関連するものが多く出土しており、金井遺跡は物部鋳物師の武蔵における本拠地の可能性が指摘されています。

この他に、関東地方の中世・近世の鋳物師の主要な作品を写真パネルによって展示しました。中世では、埼玉県内に現存する川越市養寿院鐘(丹治久友作・文応元(1260)年)、日高市聖天院鐘(物部秀重作・文応2(1261)年)、川越市喜多院鐘(源景恒作・正安2(1300)年)を取り上げ、関東地方で活躍した丹治、物部、広階、大中臣氏について現存する鐘の分布とともに解説を行いました。

近世では、徳川家による江戸幕府開府により政治・文化の中心地が関東に移るとともに、鋳物師の多くも江戸に移ってきました。香取秀真氏によると江戸で320人、京都で約130余人の鋳物師がいたと言われています。

鋳物師の多くは、神田・横山・谷保・川越・川口・天明を拠点として活躍し、田中・長谷川・椎名・西村・小幡・大田・小沼・関・加藤・粉川姓などの鋳物師名が見られます。

今回の企画展では、粉川・関・加藤性の近世鋳物師を取り上げ、写真パネルにて展示しました。粉川鋳物師は、撫石庵コレクションの一つの半鐘にその鋳物師名が刻まれています。

この半鐘には、年号が刻まれていませんが、銘文中に「日光山安光寺」「翠岩」と鐫刻され、これを辿っていくと現在の埼玉県児玉郡美里町に今も残る寺であることが分かり、そこには同じ「翠岩」「粉川市正」銘が鐫刻された梵鐘が懸けられています。この梵鐘は、寛延元（1748）年に鋳造されたもので、寺・僧・鋳物師の名が一致することから、撫石庵コレクションの半鐘も寛延元年

ごろに製作されたものと考えられます。粉川鋳物師は、もともと現在の和歌山県粉河町を中心に活躍していた鋳物師です。

また、企画展の開催にあわせて記念講演会を6月15日（日）に開催し、眞鍋孝志氏（日本古鐘研究会会長）・赤熊浩一氏（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）の両名に講演して頂きました。

眞鍋孝志氏には、「撫石庵コレクションについて」と題して、撫石庵コレクションの由来や梵鐘研究に至った経緯などを分かりやすく説明して頂きました。また、赤熊浩一氏には、自身が以前発掘調査をされた「金井遺跡」（中世の鋳造遺構が多数出土した遺跡）の例を中心に、埼玉を中心に武蔵国の中世鋳物師について講演して頂きました。なお、大崎校舎における移動展を、7月7日（月）～7月31日（木）にかけて、5号館1階フロアで行い、また7月9日（水）に、大崎校舎9B15教室にて「千葉県の梵鐘」と題し池上悟館長にご講演を頂きました。

（内田勇樹 立正大学博物館学芸員）



眞鍋孝志氏による講演の様子



赤熊浩一氏による講演の様子

展示資料の背景 (7)

立正大学博物館 2 階常設展示に、「久保常晴先生収集寄贈 樺太考古資料」が展示されています。

この資料は、本学名誉教授の久保常晴先生（1907～1978年）によって収集されたものです。

久保常晴先生は、昭和 24～52 年の 28 年間にわたって立正考古学を主導され、学位論文『日本私年号の研究』や著書『佛教考古学研究』にみるように、仏教考古学を中心とする研究において著名です。

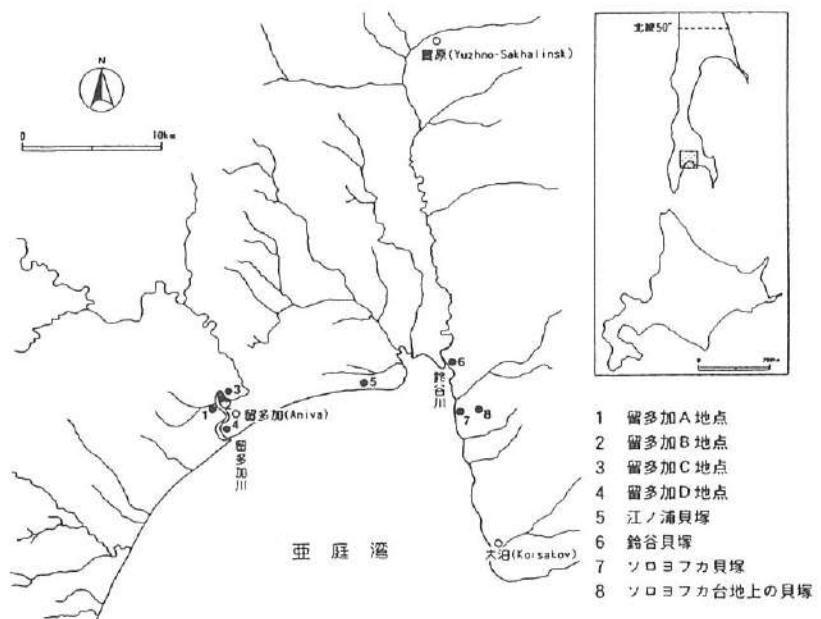
展示されている樺太考古資料は、昭和 7～10 年頃（立正大学在学中～史学研究室副手となられた頃）にかけて、当時ご両親が在住されていた樺太島の留多加（現在の Aniva）周辺の遺跡を調査された際に収集された資料です。

この樺太考古資料については、『銅鐸』第 2 号（昭和 7 年）、『銅鐸』第 6 号（昭和 11 年）、『考古学論究』第 8 号（平成 14 年）に掲載されています。なお立正大学博物館では、これら 3 編の論考を纏めて『久保常晴氏収集寄贈 樺太考古資料』館蔵資料「基礎文献」叢刊 第 1 輯（平成 15 年）に収めています。

調査は南樺太の亜庭湾岸の留多加、江ノ浦周辺の 8 地点において行われています。今回、常設展示している中でも特に出土地点の明らかになっている留多加 A・C 地点、江ノ浦貝塚、鈴谷貝塚出土遺物について紹介したいと思います。

1 留多加 A 地点 (写真 1)

留多加川と支流である小星澤の南岸に位置する遺跡で、昭和 10 年 8 月 20 日に踏査を行って



調査遺跡分布図

ます。一部を試掘し、層位ならびに遺物の出土状況が記録されています。

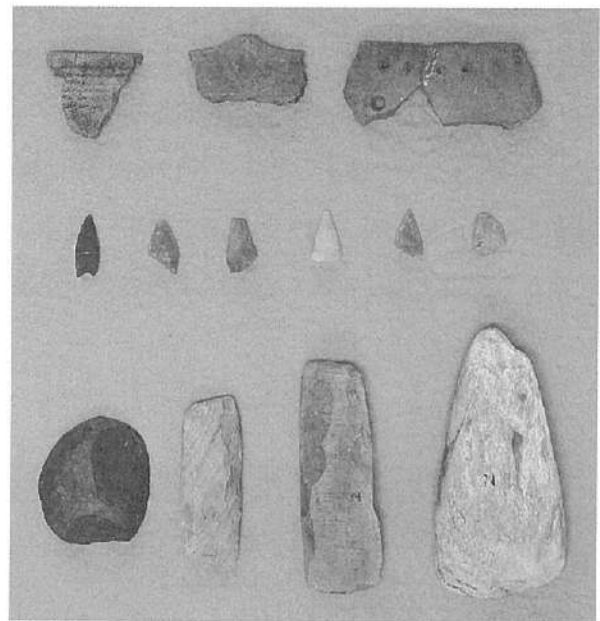


写真 1 留多加 A 地点出土遺物

展示中の遺物には、写真 1 に掲載の遺物（土器 3 点、銚先鏃 2 点、鏃 3 点、削器 1 点、搔器 1 点、磨製石斧 3 点）が見られます。

2 留多加 C 地点 (写真 2)

留多加川東岸、留多加 A 地点より北西約 2 km の所に位置します。昭和 18 年 8 月 31 日及び 9

月2日に調査が行われ、竪穴群と層位の確認をしています。展示中の遺物には、写真2に掲載の遺物（土器破片5点、銚先鏃1点、丸鑿形石斧1点）が展示されています。

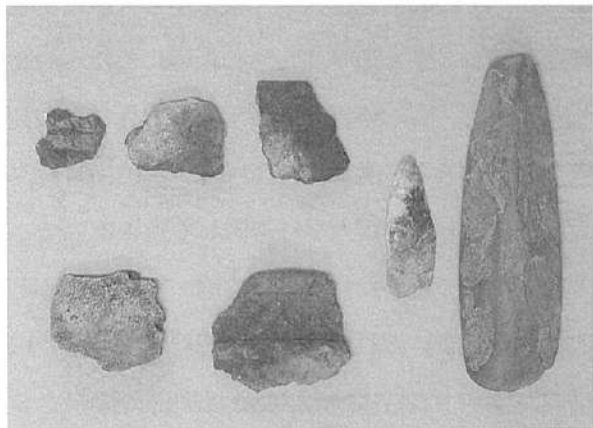


写真2 留多加C地点出土遺物

3 江ノ浦貝塚

留多加郡河東大字江ノ浦に所在し、伊東信雄氏提唱の江ノ浦A・B式土器の標式遺跡です。昭和10年7月21日及び8月21日に調査が行われて

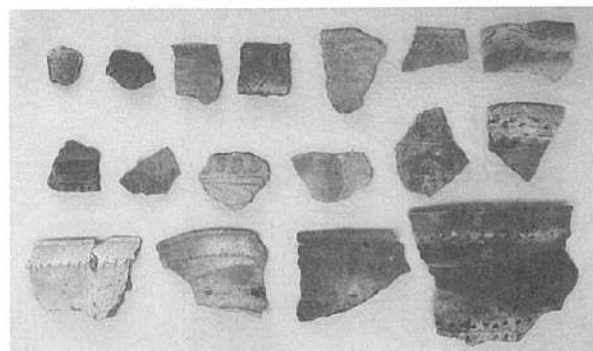


写真3 江の浦貝塚出土土器

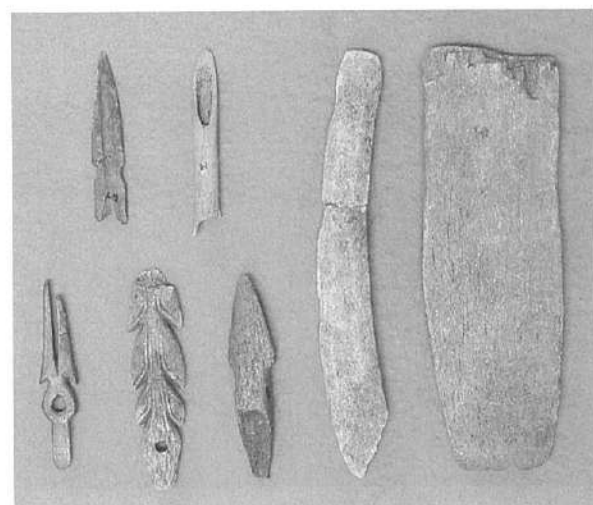


写真4 江の浦貝塚出土骨角器

います。また、昭和7年以前にも調査が行われています。展示遺物は、写真3・4・5に掲載の遺物（土器破片17点、骨角器7点、石鏃13点、石製品3点、石錘1点）が展示されています。

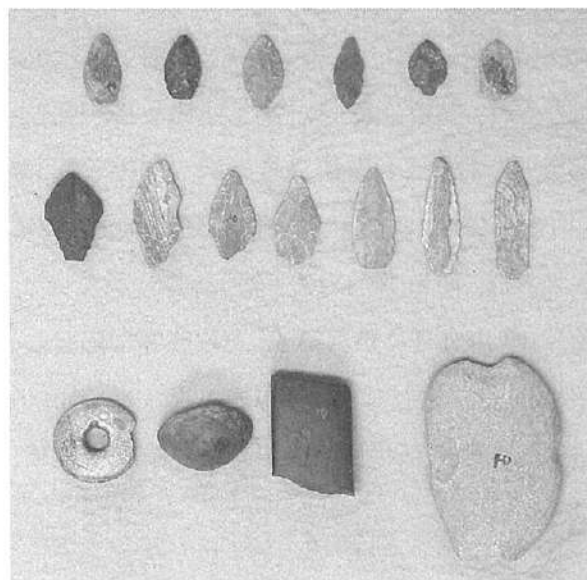


写真5 江の浦貝塚出土石器類

4 鈴谷貝塚

鈴谷川が垂庭湾に注ぐ右岸に位置し、鈴谷式土器の標式遺跡です。昭和10年7月10日に踏査され、石器30点以上・土器・骨角器を表面採集しています。展示中の遺物は、写真6に掲載の遺物（土器片3点、石鏃3点、不明石製品1点、石斧1点）が展示されています。

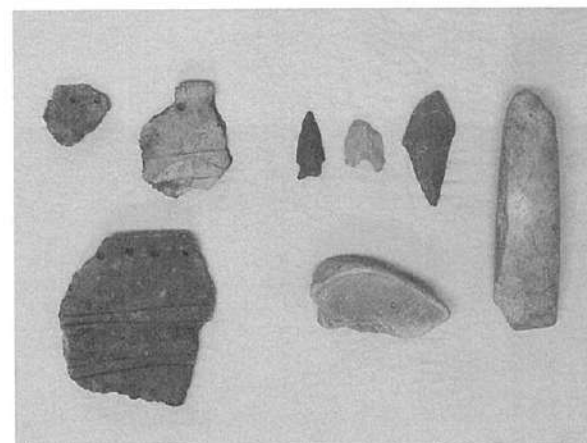


写真6 鈴谷貝塚出土遺物

（内田 立正大学博物館学芸員）

NEWS

寄贈資料

平成20年4月20日及び7月29日に、吉田格氏（1920～2006年）のご遺族の方から資料の寄贈を受けました。吉田格氏は、縄文文化の研究をされ、花輪台式・称名寺式土器などの標式土器などを設定された研究者です。吉田氏は、昭和13（1938）年立正大学専門部歴史地理学科に入学され、昭和16年12月繰上卒業されました。昭和17年2月に歩兵第42鳥取連隊に応召し、昭和21年4月に帰還・除隊されました。同年9月に日本考古学研究所研究員となります。その後、

武蔵野博物館、東京都立武蔵野郷土館に勤務されました。その間に立正大学・東京学芸大学にて教鞭をとられ、多くの学生たちの指導にあたられました。また、吉田格氏が直接手掛けてきた発掘調査などで得られた膨大な資料を、「吉田格コレクション」として立正大学に寄贈して頂きました。今回寄贈して頂いた資料は、文献・写真を中心とする資料です。これまでの実物資料である「吉田格コレクション」に加えて新たな研究資料として、博物館の資料として役立てていきたいと思えます。

今回の報告では資料点数のみの報告とします。

（内田 立正大学博物館学芸員）

平成20年度寄贈「吉田格コレクション」一覧

書籍類

発掘調査報告書・・・861冊

年報など・・・・・・153冊

単行本・・・・・・462冊

図録・・・・・・128冊

雑誌など・・・・・・523冊

写真類

スライドフィルム・・・2524枚

ガラス乾板・・・・・・36枚

ネガフィルム・・・・・・125枚



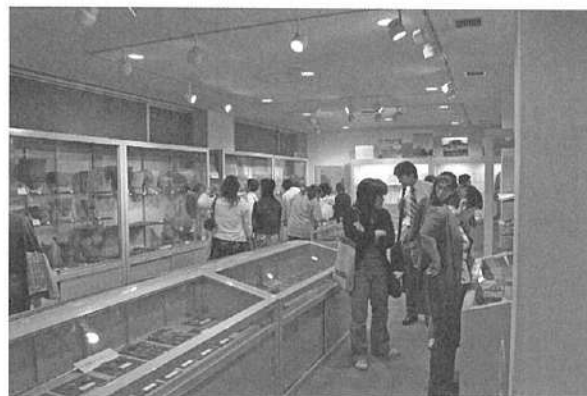
ガラス乾板資料（多摩川台古墳）

来館者数

平成20年4月2日(水)～平成20年12月20日(土)

来館者数

4月147人、5月22人、6月232人、7月34人、8月155人、9月57人、10月295人、11月403人、12月8人
計1,353人



父兄見学の様子

来館者往来

[中学・高等学校]

群馬県下仁田高等学校・西邑楽高等学校・館林女子高等学校・埼玉県深谷高等学校・誠和福祉高等学校・行田進修館高等学校・熊谷商業高等学校・本庄第一高等学校・菖蒲高等学校

[団体]

橘父兄会・立正高等学校父兄会・深谷高等学校父兄・鴻巣高等学校父兄・北本高等学校父兄・熊谷市俳句連合会星座俳句会・長野県同窓会中信地区会・彩の国いきがい大学熊谷学園・熊谷市市制モニター・(財)日本地図センター

出版物

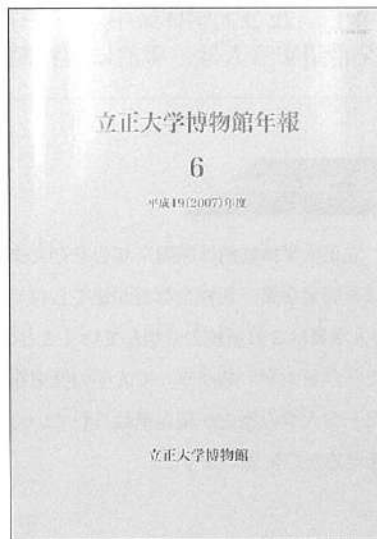
平成20年度上半期は、下記の刊行物を発行しました。

・第5回企画展図録『梵鐘—撫石庵コレクションを中心に—』(平成20年6月刊)

・『立正大学博物館年報』(平成20年9月刊)



第5回企画展図録



『立正大学博物館年報』6号

見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で集約したものです。貴重なお意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立たせていただきたいと思います。

- ・ 展示物が所狭しと並んでおりとても見応えがありました。
(県内・一般・30歳男性)
- ・ 一般の人が入って良いのか戸惑いました。もう少し案内を告知してほしいです。
(県内・大学生・30歳女性)
- ・ 復元された梵鐘の音色が非常に素晴らしかったです。他の梵鐘の音も聞いてみたいです。
(県外・一般・40代女性)
- ・ 第5回企画展を見に来ました。梵鐘の製作過程やむかしの鋳型などがみれて、大変良かったと思います。
(県外・一般・50代男性)
- ・ 大学にも遺跡があることを初めて知り、驚きました。
(県内・本学学生・19歳女性)
- ・ 第5回企画展「梵鐘—撫石庵コレクションを中心に—」を見に来ました。いろんな梵鐘が見れて良かったです。
(県内・本学学生・19歳男性)
- ・ 近くにこのような博物館があるとは知りませんでした。
(県外・大学生・18歳男性)
- ・ いろいろな鐘があり、音も聞けると良かったです。復元された梵鐘の音色はとても良かったです。
(県外・大学生・19歳男性)

利用案内

所在地： 〒360-0161
埼玉県熊谷市万吉1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
開館日： 月・水・木・金・土曜日
(大学休業中を除く)
開館時間： 10:00～16:00
*火・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)
に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは

総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。
・東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

あとがき

今年度で、立正大学博物館は開館7年目を迎えました。熊谷キャンパスは再開発事業で新校舎などが建てられています。平成21年度の入学者はこの新校舎で学んでいくことになります。以前開催した「立正大学のあゆみ」で大学の歴史を振り返りましたが、また一つ大学の歴史が積み重ねられていくのだと建築中の校舎を見るたびに思います。

(内田)

題字揮毫 田淵 観 斎 (立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第9号
平成20(2008)年12月27日発行
編集・発行 立正大学博物館
〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
e-mail: museum@ris.ac.jp
http://www.ris.ac.jp/museum/index
印刷 光写真印刷株式会社